

平成30年度



白川小だより

第12号

平成31年2月26日(火)

伝統的な言語文化に親しむ ～百人一首大会を行いました～

校長 奥村 哲也

「ほととぎす…」と読み上げられた瞬間、あちらこちらで札がはじかれました。2月15日(金)に行った「百人一首大会」の一コマです。子ども達は、この歌が大好きで、「ほ」と聞いた瞬間に「ただありあけの…」の札の取り合いになりました。毎週火曜日の「なかよしタイム」に練習を積み重ねてきた成果です。

この大会では、岐阜県かるた協会の川瀬健男会長をはじめ5人の方をお招きし、「競技かるた」についてのお話を伺った後、模範競技を見せていただきました。5年生のある児童は、「競技かるたを見たのは、2回目だったけど、すごく迫力があって、取り方がかっこよかったです。上の句の一文字、二文字を読んだだけで取っていたのすごいです。いろいろな質問にも答えてくださって、とても勉強になりました。私も、今よりもっといろいろな句を完璧に覚えて、上の句が読まれただけで札がとれるようにがんばりたいです。」と感想を述べていました。札を取るスピードや動きの美しさに、多くの子があこがれを抱きました。



ほととぎす 鳴きつる方を 眺むれば ただありあけの 月ぞ残れる

後徳大寺左大臣 (81 番) 『千載集』夏・161

「ホトトギスが鳴いた方を眺めると、ホトトギスの姿は見え、ただ明け方の月が空に残っているばかりだった」という意味になります。平安時代の貴族の間では、徹夜までして、夏の始まりを告げるほととぎすの初音を聴くことが風流だとされていたようです。

子ども達にとって、和歌の意味を理解することは、まだまだ難しいことでしょう。恋の歌の多い百人一首では、なおさらです。そうした意味は分からないかもしれませんが、百人一首を通して、伝統的な言葉の響きやリズムに馴染んでほしいと願っています。目や耳で伝統的な言語文化に触れ、親しんだり、楽しんだりすることを繰り返す中で、次第にその豊かさに気づき、理解が深まっていくと思います。

ところで、「可児カルタ同好会」では、毎週日曜日の午前9時から、広見東地区センター(可児市瀬田1736)で競技かるたの練習をしているそうです。興味のある方は、いかがですか。「小学生から取り組めば、名人・クイーンも夢ではない!」とのこと。